

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

ちじんぐほう こと

（智人弘法の事）

新版
1561
〜
1563

しじょうきんごどのごへんじ ちじんぐほう こと
四糸金吾殿御返事（智人弘法の事）

けんじ ねん がつ にち さい
建治2年（'76）9月6日 55歳 四糸金吾

しょうほう

弘

かなら

ちじん

ゆえ

正法をひろむることは、必ず智人によるべし。故に、

しやくそん

いつさいきよう

説

たま

しょうじようきよう

あなん

釈尊は一切経をとかせ給いて、小乗経をば阿難、

だいじようきよう

もんじゆしり

ほけきよう

かんよう

いつさい

しょうもん

大乘経をば文殊師利、法華経の肝要をば、一切の声聞、

もんじゆとう

いつさい

ぼさつ

嫌

じようぎようぼさつ

召

さず

文殊等の一切の菩薩をきらいいて、上行菩薩をめして授け

たま

させ給いき。

しょうほう

たも

ちしゃ

だんな

たとい正法を持てる智者ありとも、檀那なくんば、いか

ひろ

しゃかぶつ

だんな

ぼんのう

たいしやく

でか弘まるべき。しかれば、釈迦仏の檀那は梵王・帝釈の

ににん

ににん

てん

だんな

ほとけ

ろくどう

なか

二人なり。これは二人ながら天の檀那なり。

仏は六道の中

にんてん

にんてん

なか

ひと

い

たも

ひと

さんぜんせかい

には人天、人天の中には人に出でさせ給う。人には三千世界

ちゆうおう

ごてんじく

ごてんじく

なか

まかだいこく

い

たま

の中央の五天竺、五天竺の中には摩竭提国に出でさせ給い

そうら

か

こく

おう

だんな

定

か

て候いしに、彼の国の王を檀那とさだむべきところに、彼

くに

あじやせおう

あくにん

しょうにん

あくおう

う

の国の阿闍世王は悪人なり。聖人は悪王に生まれあうこと、

だいいち

あだ

そうら

第一の怨にて候いしぞかし。

あじやせおう

けんおう

ちち

殺

打

添

阿闍世王は賢王なりし父をころす。またうちそう

禍

だいはだつた

し

だつた

さんぎやくざい

うえ

わざわいと提婆達多を師とせり。達多は三逆罪をつくる上、

ほとけ

おんみ

ち

い

もの

ふこう

あくおう

ほう

仏の御身より血を出だしたりし者ぞかし。不孝の悪王と謗

ぼう し 寄 合

そうら

にんげん ふた

禍

法の師とよりあいて候いしかば、人間に二つのわざわいに

そうら

いちねんにねん

すうじゅうねん

あいだ ほとけ

怨

て候いしなり。一年二年ならず、数十年が間、仏にあだ

ほとけ

みでし

ころ

かず

知

をなしまいらせ、仏の御弟子を殺せしこと数をしらず。か

てん 怒

てんぺん 頻

ちじん

かりしかば、天いかりをなして天変しきりなり。地神いか

ちようもう

およ

つきづき

あくふう

ねんねん

ききん

りをなして地天申すに及ばず。月々に悪風、年々に飢饉・

えきれいきた

ばんみん

尽

うえ

しほう

くに

疫癘来つて、万民ほとんどつきなんとせし上、四方の国よ

あじやせおう

せ

すで

あや

な

そうら

り阿闍世王を責む。既に危うく成つて候いしほどに、

あじやせおう

ゆめ

告

ぎば

勸

阿闍世王、あるいは夢のつげにより、あるいは耆婆がすすめ

こころ

怪

だいばだった

により、あるいは心にあやしむことありて、提婆達多をば

打す ほとけ みまえ 参 様 々 怠 報 もう

うち捨て仏の御前にまいりて、ようようにたいほう申せし

み やまい

癒

たほう

戦

とど

こくど

かば、身の病たちまちにいえ、他方のいくさも留まり、国土

あんのん

さんがつ

なのか

ごほうぎよ

安穩になるのみならず、三月の七日に御崩御なるべかりし

いのち

述

しじゅうねん

せんじん

あらかん

集

が、命をのべて四十年なり。千人の阿羅漢をあつめて、

いっさいきよう

殊

ほけきよう

書

置

たま

いまわれ

恃

一切経ことには法華経をかきおかせ給いき。今我らがたの

ほけきよう

あじやせおう

与

たも

ごおん

むところの法華経は、阿闍世王のあたえさせ給う御恩なり。

ほとけ

あじやせおう

語

たま

これはさておきぬ。仏の阿闍世王にかたらせ給いしこと

にちれんもう

にほんこく

ひと

いま 作

こと

もう

を日蓮申すならば、日本国の人は今つくれる事どもと申さ

わ でしだんな

語

んずらんなれども、我が弟子檀那なればかたりたてまつる。

ほとけのたま

わ めつご

まつぼう

い

じようだつ

仏言わく「我が滅後、末法に入つて、また調達がよونا

尊

ごほう

ぎよう

ものこくど

じゆうまん

あくおう

るとうとく五法を行ずる者国土に充満して、悪王をかた

いちにん

ちしや

罵

打

らいて、ただ一人あらん智者を、あるいはのり、あるいはう

るざい

し

およ

とき

むかし

勝

ち、あるいは流罪、あるいは死に及ぼさん時、昔にもすぐ

てんぺんちよう

おおかせ

ききん

えきれいねんねん

たこく

れてあらん天変地天・大風・飢饉・疫癘年々にありて、他国

せ

と

そうろう

しゆぎきよう

もう

きよう

だいじゆう

より責むべし」と説かれて候。守護経と申す経の第十の

まき

こころ

卷の心なり。

とうじ よ

違

にちれん

いちぶん

当時の世にすこしもたがわず。しかるに、日蓮はこの一分

当

にちれん

助

こころざ

ひとびとしようしろう

にあたれり。日蓮をたすけんと志す人々少々ありといえ

（こころ）

薄

（こころ）

篤

ども、あるいは心ざしうすし、あるいは心ざしはあつけ

み合期

様々

（こへん）

いちぶん

ども、身ごうごせず。ようようにおわするに、御辺はその一分

（こころ）

ひと

勝

うえ

しんみよう

なり。心ざし人にすぐれておわする上、わずかの身命を

支

おんゆえ

てん

定

知

ち

ささうるもまた御故なり。天もさだめてしろしめし、地もし

たま

らせ給いぬらん。

との

こと

遭

たも

にちれん

殿いかなる事にもあわせ給うならば、ひとえに日蓮が

命

てん

断

たま

ひと

いのち

さんかいこうし

いのちを天のたたせ給うなるべし。人の命は山海空市

免

さだ

そいうら

じようぎよう

まぬかれがたきことと定めて候えども、また「定業もま

よ

てん

きようもん

てんだい

おんしやく

じようぎよう

た能く転ず」の経文もあり。また天台の御釈にも、定業

延 しやく

さき もう

もうこゝく

寄

をのぶる釈もあり。前に申せしように、蒙古国のよするま

慎 たも

でつつしませ給うなるべし。

しゆ ごへんじ もう たも み やまい かな

主の御返事をば申させ給うべし。「身に病ありては叶い

うえ せけん み そうろう

がたき上、世間すでにこうと見え候。それがしが身は、時

おくびよう そうら ただいま こころ

によりて憶病はいかんが候わんずらん。只今の心は、い

こと しゆつたいそうら にゆうどうどの おんまえ いのち 捨

かなる事も出来候わば、入道殿の御前にして命をすてん

ぞん そうろう ことそうろう えちご 馳 のぼ

と存じ候。もしやの事候ならば、越後よりはせ上らんは

遥 うえ ふじよう しよりよう 召

はるかなる上、不定なるべし。たとい所領をめさるるなり

ことし 君 離 そうろう

とも、今年はきみをはなれまいらせ候べからず。これより

ほか

おお こうむ

恐

そうろう

外は、いかに仰せ蒙るとも、おそれまいらせ候べからず。

だいじ

にちれん

ごぼう

おんこと

かこ

これよりも大事なることは、日蓮の御房の御事と過去に

そうろう ふぼ

旬

たま

捨

候父母のことなり」とののしらせ給え。「すてられまいら

そうろう

いのち

進

そうろう

ごせ

にちれん

ごぼう

せ候とも、命はまいらせ候べし。後世は日蓮の御房に

任

そうろう

こうしょう

打

名乗

い

たま

まかせまいらせ候」と、高声にうちなのり居させ給え。

けんじにねんひのえねくがつむいか

にちれん

かおう

建治二年丙子九月六日

日蓮

花押

しじょうきんごどの

四条金吾殿